
心の中の” こころ ”

c a d e t

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の中の“じこひ”

【Zコード】

N7408Y

【作者名】

cadet

【あらすじ】

夢、希望、野望、さまざま思いを抱いた若者が集うソルミナティ学園。ここに恋人の夢を支えたくて入学した一人の少年がいた。しかし、思いしかなかつた少年の実力は伸びず、周囲からは笑われ、友人もいなくなり、恋人も彼のそばから離れ、彼の歩みは止まつた。

だが、彼は一人の老婆と出会い、その出会いが少年を徐々に変えていくきっかけとなる。

これは心の歩みを止めた少年の物語です。

第1章第1節（前書き）

はじめまして、cadeと申します。

この小説は、私が脳内で描いていたものを衝動的に投稿してしまったものです。

小説を書くのも初めてで素人丸出しの文ですが、どうかよろしくお願いします

第1章第1節

第1章

ソルミナティ学園、夢、希望、野望などを抱いた大陸中の若者が集う場所。

完全な実力主義で、一定の成績に満たない者は容赦なく落とされる場所。

この場所にきて2年目、この俺、ノゾム・バウンティスは昼休みの間、日の当たる屋上でこれまでのことと思い返していた。

俺がこの学園に来たのは2年前、2人の幼馴染とともに故郷の村を出て、この場所にきた。

1人はケン・ノーティス。

子供のころからの無二の親友。

もう一人がリサ・ハウズ。

赤みがかつたポニー・テールを持つ美少女。

俺の恋人で一番大切な人。

彼女は昔から勝ち気な性格で村のガキ大将と喧嘩をしては一方的にボコボコにするほどの悪ガキだった。

そんな彼女との出会いは俺8歳の時、村の近くの河原で魚釣りをしているときだった。

「あ、あんた、今暇？」

そんな一言を彼女が掛けてきたのが切っ掛けだった。

赤みがかつたショートカットと勝ち気な表情、徐々に熱を帯びて

いく自分の顔・・・一田惚れだつた。

彼女の両親は今まであちこちの土地を転々としながら生活していたが、彼女の父親が旅の途中で亡くなつたことで、故郷であるこの村に定住することを決めたそうだ。

彼女は子供のころ、よくいたずらをして怒られていたが、本当に嫌がられることはせず、むしろそんな輩は絶対に許さない人だつた。そんな彼女に一番ボロられたのは村のガキ大将となぜか俺だつたが。

彼女に俺が告白したのが3年前、彼女への想いを抑えきれず、彼女に自分の想いをぶつけた。

一田惚れであること、ずっと好きであったこと。

そんな自分の告白に彼女は、

「ま、まあいいわよ、付き合つても。」

と、何事もないかのように振舞つていたが、顔は赤くなり、声も震えていて、すごく喜んでくれていた。

彼女と俺が正式に付き合つようになつてしまひくすると彼女は俺に自分の夢を語つてくれた。

「父さんと同じじようにいろんな世界を見てみたい。」

俺は彼女が亡くなつた父親のことを母親から聞いて、外の世界にあこがれていたことは知つていた。

俺は、

「じゃあ、俺はリサの背中を守るよ。」
と俺は彼女の背中を支えることを固く誓つた。

彼女はそんな俺に、「おひがとう」 と大喜びして抱きついてきた。

まじろみの中、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴る。

俺は体を起こし、固まつた体をほぐすと午後の授業を受けるため教室に向かつた。

もうその誓いが果たせないことを無理やり頭の中から切り捨てて。

俺のクラスは2学年10階級、2学年の最下位クラスだ。

その中でも俺は最底辺、いわゆる落ちこぼれの中の落ちこぼれ。クラスに入ると周囲からの侮蔑と嘲笑が俺を出迎える。

「また来たよ。最底辺。」「いい加減消えればいいのに。」「さつさと退学してくれないかな。」

それらの心無い声に心が痛むが無視して自分の席に座る。俺が席につくと3人の男子生徒が俺の席の周りに集まつた。

「よう最底辺、また意味もなく授業を受けにきたのかよ。」

真ん中の大柄な男、マルスがこちらを威圧するように話かける。

「いい加減無駄なことだと諦めれば良いのに。」「お前のせいであつちまでお前と同レベルに見られるんだからいい迷惑だぜ。」「大柄な男の脇にいた取り巻きの2人も続いて罵る。」

「まあ、幼馴染の紅髪姫にすら見捨てられたんだ、いい加減夢見る

のはやめたほうがいいんじゃないか。」

3人の嘲りに同調して周囲も笑い始める。

担任の教師が教室に入るまで、3人は俺を罵ることをやめなかつた。

そう、俺は1学年の夏にリサに振られた。

彼女は一方的に別れを告げるとすぐさま背を向けて立ち去つた。俺は彼女に何度も訳をたずねた。しかし、彼女はまるで汚物を見るような眼で俺の話を聞こうともしなかつた。

周りでは俺が浮気をしたのが原因となつていた。

リサはその容姿と実力から“紅髪姫”と呼ばれるほど女性。

一方の俺の容姿は普通で、成績も振るわない。

そんな彼女と付き合つていた俺はやっかみの対象だつたが、俺が彼女に振られたことが一気に周囲からの俺の評価を下げた。友人は一人残らずいなくなり俺を嘲笑う側に回つた。

それでも学園でまじめに授業は受けたし、自主鍛錬も怠らなかつた。

誓いを守り続ければいつか・・・・そんな思いが俺にはあつた。

そんな中、幼いころからの親友と彼女が付き合いだしたことを知つた。

愛しい彼女の隣を歩く親友と楽しそうに微笑む彼女。

実習では息の合つたコンビネーションを發揮し、他ペアを圧倒する様子を見て俺は彼女の隣に居場所が無いことを無理やりにでも理解されられた。

ノゾム side

「ふつ！」

学園の自動人形が勢いよく振り下ろした模擬剣の側面を摸造刀で打ち落とす。

打ち落とした摸造刀を返し、人形の首筋に売り込むと人形内の術式が作動して、自動人形を停止させる。

教室で座学が終わると今度は訓練場での実習となつた。

この学園には、訓練場のほかに魔法実験場等の施設も複数あり、それぞれの施設では生徒たちが自分の能力を研鑽していた。

訓練場は複数のエリアに分かれており、同じ授業を複数の階級がこなせる様になっている。

今日は主に対人戦の訓練の様で、それぞれが模擬剣などで自動人形と打ち合つていた。この人形は魔法の陣術の一つで人形内の陣に魔力を込めることで自律戦闘を行う人形である。

ただ、10階級に支給される自動人形は質があまり良くなく、ある程度決まった動きしかしないので、主に準備運動に使かわれている。

「はい。次はそれぞれペアになつての模擬戦よ。組み合わせはこちらで決めるわね。」

10階級担任のアイリ・ヴァール先生が声をかけると自動人形が停止したので、みんな手を止め、組み合わせが決まるのを待つ。

アイリ先生は長いウェーブがかつた茶髪と優しそうな眼をしており顔立ちは間違いなく美女である。

ただこの先生、頭のねじが2、3本抜け落ちているような言動をしているので、この実力主義の学園には似つかわしくない人である。学年最下位である10階級の担任を任せられている（押しつけられているともいう）のも、この性格で10階級を担当することの意

味を理解していないと周囲には思われている。

ただ本人の能力は相当なものであることはこの学園の教師をしていることから明らかである。

やがて組み合わせが決まり、それぞれがそれぞれの相手と模擬戦を開始する。

肝心の俺の相手は、

「よう、最底辺。あいにくだつたな。」

先ほど俺を罵っていたマルスだつた。

「さつさと始めようぜ、最底辺の相手なんて時間の無駄だからな。」

マルスはそういうと背中に背負つた大剣を引き抜く。

マルスは粗暴な男だが実力はかなりのもので、10階級にいるのは普段の言動と素行の悪さからである。

俺も腰にさしている摸造刀を抜く。

俺の武器は刀と呼ばれる東の島国の剣である。切ることに特化したその剣は、達人が振るえば鉄さえたやすく切り裂くといふ。

ただし、高い技量を必要とすることと、刀 자체の希少さもあって、大陸には普及していない。

ある事情から力に頼ることができない自分にとつては一番適した武器である。

「それでは、はじめ～～。」

アイリ先生の気の抜ける声とともに模擬戦が開始された。

「つおりやああああああ

大声とともにマルスが大剣を振り下ろす。

大振りの攻撃を俺は刀を沿わせる様にして受け流す。

甲高い音と共にマルスの大剣が逸れて地面にたたきつけられる。

「はつ！」

マルスの攻撃後の隙に間合いに踏み込み、首筋を狙つて刀をなぎ払う。

「遅えよ！」

マルスは腕のガントレットで刀を防ぐ。摸造刀は刀本来の切れ味を発揮せず、ガントレットにはじかれる。

マルスはそのままガントレットで顔に殴りかかってくるが、俺は頭を下げる。避ける。

再び俺は切りかかるとするがマルスは大剣を片手で強引に振りぬいてくる。

俺はやむ追えず後退し、仕切り直しとなる。

大剣でたたきつぶしにかかるマルスと、大剣の間合いの内側に入ろうとする俺との間でしばりく一進一退の攻防が繰り広げられるが、

「いい加減つぶすか。」

マルスが一言そう呟くと彼の威圧感が膨れ上がった。

“ 気術 ”

大陸東部発祥の技術で、本人の生命力を隆起させさまざまな現象を顕現する技術。

マルスはこちらに一気に踏み込んでくる。その速度は今までとは比較にならない。

気術による身体強化の成果である。

一気に獲物を間合いに捕らえると大剣を振り下ろす。

俺も咄嗟に気術を使用し避ける。避けた大剣は轟音とともに土面を捲り上げた。

「ちつ！かわしのかよ。」

一撃で決められた事にいらついたのか、マルスが毒づく。彼は地面にめり込んだ大剣を引き抜くとそのままこちらに再度切りかかってきた。

強力によつて振り回される剣戟を氣術による身体強化を使い捌く。鉄と鉄とがぶつかる音が戦いの壮絶さを物語つているが、その内容は一方的だつた。

マルスの身体強化は俺の身体強化をはるかに上回る効果を上げている。

対する俺の身体強化の効果は俺自身の特異性もあつてズズメの涙程度。

マルスは素行こそ悪いが、その実力は間違いなく学年の中でも上位である。

逆に学年上位の実力を持つても最下位階級に甘んじているマルスの素行の悪さもひどいが。

そのマルスの強化した剣技はいつものノゾムではさばききれない。しかしこのズズメの涙程度の身体強化がそれを可能にしていた。強力によつて振り下ろされる剣戟をさばき切れる最低限度の身体能力を授けてくれている。

「いいかげんつぶれやがれ！！！」

すぐにつぶせたと思った俺の予想外の抵抗にマルスのいらだちはさらに募る。マルスはさらに氣力を高めて襲いかかる。

「グ、簡単につぶされてたまるか！」

俺は相手のペースに巻き込まれないよう必死に食らいつく。

斬撃の威力は上がつたが、マルスの攻撃は単調になり、その単調さゆえさばききることは不可能ではなつた。

しかし、あくまでさばき切れるだけであり、反撃する余裕は俺にはなかつた。そして「反撃できなければ、結果分かり切つていい。やがて限界が訪れた。

マルスの一撃を捌ききれず体制が崩れる。

崩れた体制を立て直す暇もなく、返す刃が俺を襲う。

「くたばれ！」

大きく体制の崩れた俺はとっさに刀をマルスの大剣と自分の体に入れるが、相手の強化された斬撃を止めることは出来ず、そのまま吹き飛ばされて訓練場の壁にたたきつけられた。

「ちつ、ウジ虫が無駄な抵抗しやがつて。」

そんなマルスの言葉を聞きながら俺は意識を失つた。

ノゾム side out

「痛ツ！」

ぼんやりとした意識が背中の痛みで覚醒する。気がつくと彼は保健室のベッドの上だつた。

「おや、気が付いたかい？」

保健室の机では眼鏡をかけた白衣を着た女性が仕事をしていた。

彼女はノルン・アルティナ、この学園の保健医で知的な美女という言葉がぴったりな女性だ。

彼女はこちらに来ると目の前で指を動かしたりして意識の状態を

確認している。

「よし、意識ははつきりしているな。どこかほかに痛みを感じる場所はあるか？」

彼は首を横に振つてこたえる。

特に異常はなさそうだ。

「分かつた。もしどこか痛みを感じるようになつたらいつでも来なさい。我慢して悪化したらなお悪いからね。」

彼女は、微笑みながら言う。その表情は知的な雰囲気とは違い、頼りがいのあるお姉さんといった感じで、はじめとはまた違う印象を覚えるだろう。

事実、彼女は決してクールなだけではなく面倒見の良い頼れる先生の一人で、実際男女問わず、学園でもかなりの人気がある。そんなとき、間延びした声とともに保健室に入つてくる人影があつた。

「ノルン~~~~、ノゾム君の様子はどう~~~~。」

入つてきたのは担任のアイリ先生。

「アイリ。ここは学園だ。呼び名には先生をつけなさい。」

「え~~~~、ここじゃなら誰もいないし、大丈夫よ~~~~。」

「彼がいるだろう、彼が。」

彼女たち二人はプライベートに置いても仲が良く、実は学生時代からの親友同士であるらしい。

ちなみに二人ともこのソルミニナティ学園出身である。

「ノゾム君なら大丈夫だよ。それよりノゾム君体のほうは大丈夫~~~~？」

アイリ先生が彼を心配そうに見つめてくる。

「だからけじめを・・・もういい。彼は大丈夫だ、かるい脳震盪くらいいだよ。」

「はい。少し頭がクラクラしますが大丈夫です。」

「よかつた~~~~。心配したんだよ。ノゾム君にもしものことがあつたら大変なもの。」

そう言つて彼女は微笑んだ。

その様子は本当に安心した様子で、彼女が彼をどれだけ心配していたかが分かる。

「大丈夫だよ、アイリ。彼はこのくらいではリタイヤはしないよ。」

「もう、ノルンは冷たいよ。」

「ちゃんと彼の状態は把握した。心配するのはいいが行き過ぎてはだめだよ、アイリ、生徒を信頼して生徒自身の成長に任せることも必要だ。」

言い合いをする二人だが、アイリ先生はいつもと違つて強い口調だし、ノルン先生はかなりくだけた感じで話している。

いつもとは違う調子で気兼ねなく話しているところを見ると、2人の信頼関係がうかがえる。

ノゾムはそんな様子を見ていると、もう放課後で日が暮れしており、いつもの鍛練の時間が迫っているのが分かつた。

あわてて荷物をまとめて帰り支度し先生たちに挨拶をする。

「ノルン先生、アイリ先生ありがとうございました！失礼します！」
彼ははじかれたように保健室を飛び出した。

ノルン side

あわてて保健室から飛び出して行つた彼を見送ると、私は親友に声をかける。

「彼が噂の人物か。なるほど噂はあてにならないな。」

「でしょう〜〜。」

親友がうれしそうに微笑む。

ノゾム・バウンティス。

2学年きつての落ちこぼれ。

噂では1学年の時、幼馴染で同学年でもトップクラスの実力を持つリサ。ハウinzの恋人だつたが浮気がばれて振られたそうだ。成績自体も高くなかったため、すぐさま嘲笑的となつた。

だが私自身、彼は決していい加減な人間ではないと分かつた。彼が運び込まれて時、体の状態を確認するために服を脱がしたが、その時柄もなく驚いた。

彼の体は鍛え上げられた筋肉に覆われていた、その身体には無駄がなく一種の完成形に近いと思った。

最も驚いたのはその身体は決して天性のものではないというものだつた。

ちょうど彼の使う刀のように、気の遠くなるほど鍛練を行うことによつて鍛え上げられた肉体。

欲に溺れている人間では無理だ。

いや、今の2学年にあれほどの肉体を作る鍛練を行う者はいない。しかも彼の身体には無数の傷があり、それはもしかしたらベテランの冒険者にも匹敵していたかもしれない。

おそらく噂は彼の特異性やリサ・ハウinzの恋人だつたなどが複雑に絡み合つたことが原因だらう。

彼の特異性。

それは彼が1年の時に発現した“アビリティ”だ。

アビリティ

種族を問わず発現する能力の総称で、発現すると本人はアビリティに応じて様々な恩恵を受けることができる。

その内容は魔法の適性向上や、身体能力の向上など多岐にわたり、その種類は無数にある。

ノゾム君のアビリティは“能力抑圧”。

発現すると本人の能力を抑圧し、一定以上成長しなくなる。

抑圧される能力は人によつて変わるが彼の場合、力、魔力、気量と3つの能力を抑圧されており、彼の大きなハンデとなつていて。発現することが極めてまれなアビリティではあるが、本人への恩恵は全くなく、むしろ足を引っ張るアビリティである。

アイテムや魔法、気術による強化は可能であるが、その効果は普通の人間にもたらす効果より明らかに劣る。

これにより彼の成績はさらに下がり、同学年で最下位となる。これまで進級できたのは、筆記試験の結果を上乗せしているからである。

それでも進級の際、2回追試を受けている。

「アイリが彼を気にする理由がわかつたよ。」

「でしょう～～～。みんなノゾム君のこと悪く言うけど、あれだけ

頑張っているんだもの。私は報われてほしいわ～～～。」

アイリは普段はぼややんとしていて頼りないが、肝心な事には極めて鋭い観察眼を発揮する時がある。

彼については、普通の日常では悪い噂しか聞かない。

おそらく日々の生活の中で、噂の彼と現実の彼と間にわざかな違和感を感じ取つたのだろう。

なぜ彼がここまで食らいつけるのかはわからないが、そこまで努力しているのだ。

私には親友と同じように教師として、人間として彼を応援してやりたい気持ちが確かにわいていた。

ノルン side out

第1章第1節（後書き）

いかがだったでしょうか。初めての小説とこりつけていろいろ至らないところがあるかと思います。

ですが、私もこの場の小説が好きなので、私の小説で少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

今回の投稿は試験的なものなので、場合によつては削除もあり得ますが、ご容赦願います。

登場人物紹介

ノゾム・バウンティス（主人公）

地方の農民出身、能力値は魔力以外平均的。

恋人の夢を支えたくて学園に入学するが、成績は伸び悩み、さらにアビリティの能力抑圧により、さらに成績が伸び悩む。

入学半年後に突然恋人から別れを通告され、成績も最下位クラスまで落ち、生徒たちから嘲笑の対象となる。

使用武器は主に刀。

アビリティ

能力抑圧

本人の筋力、魔力、気を一定値以下まで落としてしまうアビリティ。

魔法、気術、アイテムなどによる強化は受けられるが、効果が著しく減退する。

ほとんど発現しないアビリティではあるが本人への恩恵は全くと言っていいほど

ない。

ランクD -

リサ・ハウズ

主人公と同郷で元恋人、現在もう一人の幼馴染と恋人同士。

成績優秀、容姿端麗、勝ち気な性格であるが、根は純情でさみしがり屋。

世界中を見てみたいと思い、世界中の人が集まる学園に入学する。主人公とは相思相愛の恋人同士だったが、1年の夏に突然別れを言い渡す。

現在はもう1人の幼馴染と恋人同志である。

成績はかなり良く、学園内の最上位の1階級である。

武器は片手剣と短刀の2刀流、炎、風の魔法にも適正がある。

ランクA

ケン・ノーテイス

主人公のもう一人の幼馴染で現在のリサの恋人。

あらゆる方面に才を持ちを持つ。所属クラスは1階級。

顔立ちもよく、性格もいいので告白してくる女生徒が絶えないが、あくまでリサ一筋。

ノゾムと普通に会話する数少ない学園関係者。

ランクA

アンリ・ヴァール

主人公のクラスである10階級の担任。

茶色のウェーブがかつたロングヘアの美女。

性格は天然で基本的にほわほわしている。

だが、鋭いところがあり、意外なことで核心を突くことがある。

鈍そうな外見に似合わず、戦闘能力はかなりある・・・と思われる。

ノルン・アルティナ

学園のお保健室の先生。

アンリとは学生時代からの親友同士。

切れ目のクールな美女で、一見冷たそうに見えるが実はかなり面倒見がいい。

シノ

主人公に刀術の手ほどきをおこなつた老婆。

東の異国出身、戦闘能力は極めて高い（ランクS）。

この国に来たのは偶然で、理由は実家のお家騒動で追放されたか

ら。

性格は齡のわりに子供っぽく（80歳ほど）口よつ先に手（ワケ）クS相当の技）が出る。

滅龍王ティアマット

龍の中でも異端中の異端。

本来は黒龍であったが、他の龍を食らい、その力を取り込み続けたため、その力は他の龍種が手を下せないほどになり、やむをえず大陸各地の地脈を利用して、封印されていた。

齡1万年以上を生きており、正確な年齢は把握されていない。

漆黒の体躯に黒の5色6翼の翼を持つ。

取り込み続けた力に理性がほとんど飲まれている。

封印自体がティアマットの力で揺らぐことがあり、その揺らぎに巻き込まれたノゾムに偶然遭遇し、彼をおもちゃにして遊んでいたら、反撃され殺された。

登場人物紹介（後書き）

誤字や間違いを修正。

かなり間違いが多くてすみません。

世界観説明

アークミル大陸

本小説の舞台となる大陸。

この大陸は定期的に北方の荒地に生息する強力な魔獣の侵攻に曝されいる。

本編開始の10年前にこれまでをはるかに上回る侵攻があり（通称、大侵攻）、3つの国が崩壊している。

崩壊した国の領地は強力な魔獣の生息圏（通称、獄地と呼ばれている）。

この大陸には人間の他に獣人、妖精、エルフなど多種多様な人種が生活しており、大侵攻で崩壊した国には異種族の国もあつた。

学園都市アルカザム

ソルミナティ学園設立のために作られた都市。ソルミナティ学園を中心に行政庁、東に市民街、南に商業区、西に職人区がある。また、各所に冒険者ギルドもあり、学生たちもランクに応じた仕事を受けることができる。

都市間の交通の便はあまり考えられていない。これは各国勢力団の中立地點にこの年が作られたからである。

しかし、この都市は最新の研究機関も存在し、都市建造において多くの資金が導入されたので大陸における一大拠点であることは疑いようもなく、それゆえに多くの人と物資、経済が成り立つた。

ソルミナティ学園

魔獣の大規模侵攻に対抗できる人材を育成するために大陸中の国が出資して作られた学園。

最高学年は4年生で、教育内容は戦闘だけでなく、研究、政治等

多方面に活躍できる人材を育成している。

生徒は能力に応じて1から10階級のクラスに分けられ、待遇も変わる。

1階級では訓練場や魔法の実験場を優先的に使用でき、場合によつては専門の先生からの個別指導も受けられる。

良くも悪くも実力主義の学園で一定の成績に満たない者の落第は当たり前で、退学も珍しくない。

また、各国の将来を担う人材を育成しているので、将来の国家間の勢力に影響を与えるので、政治的な駆け引きの場にもなっている。主人公は能力抑圧のせいで実技の成績が良くないので筆記で成績をどうにか保つていた。

魔法

大気中の魔素または体内の魔素を自身の精神力と術式で隆起させ、さまざまな現象を顕現する技術。

基本的に詠唱術、陣術に分けられるが他にもさまざまな術式が存在する。

精霊魔法

世界の眷族たる精霊の魔法。

人間や亜人などが使う魔法違い、詠唱、陣など外界に干渉するためのプロセスを必要としない。

気術

本人の生命力を隆起させさまざまな現象を顕現する技術。

基本的に魔法と違い、詠唱、陣を必要としないものが多いが、魔法程大規模な現象を起こしにくい。

また気は生命力そのものなので気の完全な枯渇は死を意味する。

ランク

大陸で採用されている冒険者や軍人等の個人能力を段階的に評価

したもの。

ランクを上げるには魔獣を倒す、依頼や任務を完遂するなど、本人の行動によって評価される。

ランクE

最下位ランク、新米冒険者、新米兵士、学園では1年まではほとんどの人がこのランク。

ランクD

ランクとしては下位の冒険者や兵士、学園では2年生あたりが妥当なランク。

ランクC

ランクとしては中堅の冒険者や兵士、学園では3年生あたりのランク。

ランクB

上位の冒険者や騎士、学園では4年生に相当する。

ランクA

1流の冒険者や近衛騎士などだけでなく、政治、経済、軍事の中核にかかる人も相当するランク。

ランクS

超1流の人物に与えられるランク、現在大陸に十数人しかいない。

ランクSS

現在大陸には数人いるが、ほとんどの国にはこのランクを持つ人はいない。

龍

大陸内で最強の生物。

生物であるが実は精霊種の1種。

精霊と違い、物質的な肉体を持つているがその肉体は精霊の源であり、この世界の根源物質である源素の塊。

ただ肉体を持つのでその生態は生物に近い。

自らが死ぬと自分の子孫または自分を殺した対象に自分の力を継承させる。

龍殺し

龍を殺し、その力を継承した者のこと。

歴史上数人しか存在せず、その力は絶大、また異能に目覚める者もいる。

この数百年出現していない。

竜

魔獸の1種。

魔獸の中でも群を抜いた戦闘能力を持つているが龍には遠く及ばず、龍にとつては大したことはない。だが、人間には脅威そのものであり、恐怖の具現である。

源素

この世界の根幹の要素、この源素が寄り集まり、精神的なエネルギーに変化したものが魔素又は魔力であり、生命力のエネルギーに変化したもののが氣である

第1章第2節（前書き）

第1章第2節です。 今回は主人公の師匠が登場します。
それではどうぞ。

第1章第2節

学園都市アルカザム、ソルミナティ学園が作られた都市であり、学問の街として大陸でも有名である。

都市の中心部にソルミナティ学園があり、その周囲をクモの巣状に道が作られている。

都市の北部には都市の政治を司る行政庁をはじめとした政治機関と、その政治機関をまとめている各国貴族などの富裕層が生活している。

東は市民街で、生徒たちの寮や、一般市民が多く生活し、南は商業区で各国から集まつた商品や物品が集まり、この都市の経済の中心となつてている。

また、冒険者ギルドもあり、学生もランクによつては仕事を受けることができる。

西は多くの職人が集まる職人区で鍛冶屋や医者、裁縫など各国の技術を生かした職人たちが日々しのぎを削つてている。

都市の外は東西南北に道が走り、道以外は鬱蒼とした森が広がり、人の進入を阻んでいる。

この森には様々な魔獣が現れ、一般人でも勝てるような魔獣から、ベテラン冒険者がてこずるものまでさまざまいる。

ただ、基本的に強力な魔獣は森の奥に生息しており、街や街道周辺には強力な魔獣は出現しない。

そんな森の中の人目を忍ぶように1軒の小屋があつた。その小屋の庭で一人の少年と一人の老婆が刀で打ち合いをしていた。一人は学園の落ちこぼれ、ノゾム・バウンティス。

もう一人の老婆の名はシノといつ。

その打ち合いは圧倒的に老婆が勝つていた。それは学園でのマルス

との打ち合いなど比較にならなかつた。

学園の試合で彼はマルスの斬撃をまかりなりにも凌いでいたが、老婆との打ち合いは明らかに一方的で、ノゾムはまさに老婆のおもちゃだつた。

刀での打ち合いは3合程で体制を崩され殴り飛ばされる。転がつたノゾムに老婆はすぐさま追撃し、刀を躊躇なく振り下ろす。

ノゾムは脚部に気を集中させて爆発させる。気術の技の一つ、“瞬脚”である。

一瞬で加速し、離脱するがすぐさま老婆も同じように瞬脚を使用し加速しつつ刀を納刀。離脱したノゾムの先に回り込み、抜刀術による抜き打ちを打ち込む。

勢いがついて止まり切れない彼は、片足を軸に体を回転させて抜き打ちを切り払うが体制が大きく崩れる。

そこに老婆の切り返しによる追撃が迫る。

ノゾムは刀を老婆の剣筋に対し斜めに寝かせ、わざと足の力を抜いて体を落とす。老婆の切り返しは寝かせた刀の上を滑り、彼の身体には当たらないが、同時に老婆の蹴りが襲う。

ノゾムは体を落とした状態では避けるのは無理と判断。咄嗟に足に力を入れ、後ろに飛ぶと同時に刀の柄を蹴りと体の間に入れるが大きく飛ばされる。

地面に転がつたノゾムが体制を立て直す暇もなく老婆が追撃。首に刀を突き付ける。

「まいりました。」

「ふむ、まだまだじやな。修練が足りん。」

老婆はそう言つと刀を納めた。この老婆、シノコモノゾムの刀術の師である。

彼女との出会いはノゾムが森の中で鍛錬していたときだつた。

その時の彼はリサに振られ、誓いを果たせなくなつたことで自暴自棄になつており、がむしゃらに鍛錬していた。

それは鍛錬でなく逃避。体がぼろぼろになるまで鍛錬することで恋人とのことを考えないようになつていていた。

そのあまりの過酷さと無意味さに我慢できず老婆が声を掛けたことが始まりだつた。

「そろそろ夕餉か、ノゾム、用意してくれ。」

「はい。師匠。」

老婆の声にノゾムが答える。

その声には疲れが見えるものの、はつきりとした口調で夕餉の準備にかかる。

シノ side

（未だ引きずつているが、まだましになつたかの）

老婆は彼の様子を見て声を出さずに呟く。

彼と出会つたとき、彼は森の中で鍛錬をしていが、その状態はひどいものだつた。

蓄積された疲労を回復する間を与えないほど鍛錬を繰り返したせいで筋肉はやせ細り、頬はこけて餓鬼のようになつていていた。剣を握る手の皮はズル剥け、関節は炎症を起こし、彼の体はぼろぼろになつていた。

あまりにひどいので口出ししたが一向に止める気配がない。

その時見た彼の顔には見た田どうり生氣がなく、眼の奥には外見よりさらに暗い負の感情があつた。

その眼に今の落ちぶれた自分を見た私はひどい嫌悪感に襲われた。すぐさまその場を離れてしまつた。

一時は無視を決め込んだが、時間とともに彼の暗い眼が気になつた。

考えないようにしても頭をよぎる彼の眼に業を煮やし、様子を見に行くと彼は魔獸に襲われていた。

襲っていたのはワイルドドック。大陸中に生息する魔獸であり、群れで行動する。

魔獸のランクは低く、一般的な冒險者でも討伐できるが、疲労が極限に達している彼には竜にも等しい脅威だつた。

体中に傷を負い、流れ出す血とともに朦朧となる意識、まわりにはたすけてくれる普通の人間なら絶望的な状況でところが、彼は諦めがなかつた。

もはや失血死してもおかしくないほどの血を失つても彼はワイルドドックに抗つていた。

“死にたくない” “あきらめない”

剣術、戦術はまだまだ未熟。しかし暗い感情を宿していた眼は“生きる”という明確で強い意志を輝かせていた。

それを見た瞬間、私は彼を襲っていたワイルドドックを切り飛ばしていた。

その1週間後、私の小屋の前で剣ではなく、刀を振るう少年の姿があつた。

シノ side out

ノゾム side

夕餉を済ませ、後片づけをして、食後のお茶を飲んでいる師匠の向かいに座り、俺もお茶を飲む。

師匠と出会い、刀術を師事してもらい、今日まで様々なことを教

わった。

闇の中でもがいていた自分に確かに光が見えた。

リサに振られ、誓いを果たせなくなり、周囲に誰もいなくなつた。そんな日常からの逃避で無茶な鍛錬を続け、ボロボロになつた自分を襲つてきたワイルドドック。

生死の境の中で“もう死にたい”という感情よりも“死にたくない”という思いをが湧いた。

“死にたくない”という感情は“生きたい”という感情になり、“あきらめない”という意思になった。

そんな窮地を師匠に救われ、弟子入りし、鍛錬を続けている。リサのことを考えるとやつぱり辛い。けど、今は以前よりは気持ちは軽くなつた。

それはやはり師匠がいるからだらう。

そんなことを考え、師匠を見ると満面の笑みでお茶菓子をほおばつている。鬼神のごとき強さを持つ師匠の年不相応のその姿に少しほほえましく感じる。

「なんじゃ。人の顔をじろじろ見て。さては私にほれたな？」

ふざける師匠に即座に反撃する。

「自分の年齢考えて発現してください。いくら俺でもさすがに師匠の年齢は守備範囲がツバツー！」

余計な事を言つた俺の顔面に衝撃が走る。師匠が拳を抜き打ちのよつに振り、衝撃波をピンポイントで放つたのだ。

しかも卓上のお茶菓子にはそよ風すら吹かないという徹底ぶり。

「ノゾム、ナンダッテ？」

「イイエ、ナンデモアリマセン、シショウニミホレテイタダケデス。」
反射で謝罪という自己保身に走る。

「ツツコミだけなのに無駄に高度な技を披露する師匠。

彼女はこんなところに隠居しているが、実力は間違いなく大陸でも上位、師匠いわく“学園の中でもトップの剣士と並べるじやうづ”と言っていた。

ちなみに、学園最高の剣士はジハード・ラウンデル。ララングの騎士で大陸でも超が付くほど名の知れた剣豪である。

そんな人物と同格な師匠。いつたい何者か疑問である。

お茶を飲み終わりそろそろ寮に帰る時間となつた。

「それでは師匠。俺は寮に戻ります。」

「うむ、ではまた明日な。」

「はい、師匠おやすみなさい。」

シノ side

私は帰っていくノゾムの背を見送り小屋に戻る。

彼は強くなつた。能力抑圧に抑圧された身体能力のため本人も気付いていないし、刀の技量はまだ私のレベルに達していないが、かなり近づき、全く届かないとは思えない位置にある。この1年間での成長を考えれば異常だ。

もともと彼の癖はこの大陸で使われている直剣より曲刀を使うことに向いていた。

腕の力で叩き切るより、体全体を使い断ち切る動きをしていたのだ。

何より彼を強くしたのは、本人の努力だろう。たとえそれが現実からの逃避からくるものでも。

はじめは単純な素振りのみを1日中させ続け、ひたすらに森を走らせた。

当然、魔獣に襲われもしたが自力でどうにかさせた。さすがに手の余る相手は私が気付かぬ様に処理したが。

次はひたすらに模擬戦である。

当然、私は持てるすべての技を死なない程度にあいつに打ち込んだ。

なすすべなく私に倒され、骨折、嘔吐、気絶は当たり前だった。今はまだどうにか捌けるようになり、骨折などの重傷を負うことは少なくなっている。

私が課した修練を堪え切つているのだ。並みの奴なら1週間を経たずに辞めるだろう。

今の彼の技量なら本人の能力抑圧がなければ私とかなり打ち合えることは間違いない。

それでも模擬戦に勝てず、学園での成績も伸びないのはやはり能力抑圧の影響が大きい。

力、気量に制限を受け、魔力いたってはほぼ無く、初級魔法さえ使えない。

気術やアイテムによる強化もほとんど効果がなく、強化魔法も使えない。

これらのハンデを埋めるため、技や気の制御を磨いたが、使う技は必然的に一点集中型の高威力であり、殺傷能力が極めて高いので、学園の模擬戦では使えない。

幸い、肉体能力は瞬発力が必要となる筋力は能力抑圧による制限が厳しいが、本人の運動神経や持久力などの基礎能力は抑圧を受けていないようなので鍛えることができた。

しかし、気術等の強化の効果が低いので、それでも目に見えるほ

どではないし、相手が強化をかければ抑圧されていない能力でも相手が上回る。

なかなかうまくいかないものだ。

もう一つ気になるのが、本人のこれから先の目標が定まつていな
いということである。。

その場の戦闘では“生きるため”という理由でいいかもしれない
が、これから先はそうではない。

“何のために強くなるのか”言つならば“こじろの芯”が必要に
なる。

“こじろの芯”がないまま力をつければ、いずれその力に振り回
される。

そして彼の芯はすでに一度折れている。

これから先、彼がどうするのかわからないが、私はすべてを教え
よう。彼が私のように後悔しないよう。

シノ side out

第1章第2節（後書き）

いかがだったでしょうか。主人公の師匠であるシノは第1章の核となる人物で、後々の主人公に大きな影響を与えます。

このばあさん、80歳ほどですが大陸でも十数人しかいないランクSクラスの達人です。

ただ、意外に子供っぽく、怒ると即座に達人級の技が飛んできます。

また、今の主人公が訓練する理由はその根幹に“逃避”があります。

恋人に振られらことからまだ立ち直っていません。その辺も徐々に書いていこうと思います。

ノゾムはいつものように学園に登校する。教室に入るとすでに登校していた生徒が彼を見るが、すぐにバカにしたような視線を浴びせる。彼の机には誹謗中傷がいくつも書かれ、それを片付ける彼を周囲がクスクスと笑う。

徹底した実力主義が基本方針であるこの学園は極めて明確に勝者と敗者を分ける。

このクラス、10階級の生徒は間違いなく後者であり、この学年で最下層扱いされる。そんな敗者たちは、大抵自分たちよりも弱い者を見つけ、それに自分たちの不満をぶつけるのだ。

彼はこのクラスでは腫れ物扱いであり、彼が話しかけても徹底的に無視する。

彼に話しかけるのは担任のアンリ先生か素行が悪く、問題児のマルスくらいである。もっともマルスは徹底的に彼をこき下ろすことしか考えていないが。

「それでよ～その女がまたいいカラダで・・・」

バカ話に花を咲かせながらマルスたち3人組がやつてきた。マルスはこちらに気付くとニヤニヤ笑いながらやつてくる。

マルスは背が高く、体格はいい。素の顔も悪くないがその人を馬鹿にするような表情がすべてを台無しにしていた。

「よつ、落ちこぼれ。また無駄なことをやりに学園に来たのかよ。どうせなら便所掃除のほうがいいと思うぜ、まだ俺たちのためになるからよ。」

「お～マルスやめとけよ。」いつの掃除した便所なんて誰も使えない

えよ。」

「そうだぜ、それより俺たちの訓練人形なんてどうだ。武器の試しきりの役には立つだろう。」

ノゾムは何も言わない。いつもどおりの罵倒、いつもどおりの嘲笑、いつもどおりの日常の始まりだった。

ノゾム side

今日は午前中が魔法の講習だった。講師は保険医のノルン先生。

「知つてのとおり魔法は自身の精神力を糧に体内の魔素を隆起させ、さまざまな現象を顕現する技術だが、隆起させる対象は自身の魔素だけではなく外界、つまり大気中の魔素も可能である。

主に大規模魔法を使用する際は、必ずと言っていいほど外界の魔素を使用する。これは儀式魔法と呼ばれ、もともと精霊たちや神などに祈りをささげる神事が起源である。大勢の人が同じ様に祈りを捧げこれが現在の詠唱術の基礎でもある。

すなわち・・・・・

彼女は無駄なく、つづがなく授業を進めていく。アイリ先生の授業は彼女の雰囲気もあってどこかゆるい雰囲気だが、ノルン先生の授業は逆にシンと静まり返り、張り詰めるような雰囲気がある。

俺は先生の話をすることを逐一メモを取っていた。能力抑圧によつて実技の点が思うように取れない自分にとって、筆記試験はまさに生命線だ。1学年末の学年末試験の実技重視の試験では、追試試験に追加される筆記試験でどうにか進級した。実技試験に筆記試験が追加されるので普通の生徒ならさらに追い打ちだが、俺にとつてはまさに最後の砦である。

授業終了の鐘とともに、講習の時間が終了し、実技の時間に入る。

ノルン先生の呼びかけとともにクラス全員が訓練場に移動する。

訓練場に到着し、それぞれが思い思いの魔法を使っているのを見ながら、俺はただ自分の中の魔力を感じ、操るという1学年でしかやらない訓練に没頭していた。

この大陸の人間は大なり小なり魔力を持っているが、俺の魔力はその中でも特に低い。元々はそこまで低くなかったが、能力抑圧が発現してからは初級魔法さえ使えなくなつた。

だからこそ、ただ初級の鍛錬を繰り返し、制御力を上げることのみをしている。

その様子を見て周囲の生徒たちが再び笑い始める。それにつられてマルスがやってくると授業中にも関わらず俺をののしり始めた。

「なんだよ、まだ1年の時の訓練なのか最底辺。赤ん坊の歩行器がいるんじゃないか。ハハハハ。」

それらの嘲笑を無視して訓練に没頭する。そもそもこのとき俺には彼らの声が聞こえていなかつた。

訓練に集中すると周りが見えなくなる。特に基礎訓練のときは顕著でこれは師匠と出会った時の状態もある。

「・・・おい、何無視してんだ。」

俺が聞いていないことにイラついたのかマルスの雰囲気が一気に剣呑なものになる。元々彼は自己顯示欲の強い人間だ。

最下位の俺に馬鹿にされたと思ったのだろう。それでも俺には聞

こえない。完全に自分の内側の世界に籠つてしまっていた。

突然、横から衝撃を受け弾き飛ばされた。マルスが風の魔法で俺を吹き飛ばしたのだ。

放った魔法は“エア・バースト”風の魔法の一種で、圧縮した風を解放したときの衝撃波で相手を吹き飛ばす魔法だ。

まだ收まらないのかマルスが続けて魔法を放とうとする。だがその前にノルン先生の魔法がマルスの足元をえぐつた。

「そこまでだ、これ以上は教師として必要な措置を取ることになるぞ。」

放された魔法は“エア・アロー”。風の初級魔法だが、詠唱速度はマルスより早く、精度、威力もマルスをしのぎ中級の単体魔法に匹敵している。

マルスのエア・バーストより彼女のエア・アローのほうがすぐれていることは明白だった。

「ちつ、わかりましたよ。」

捨て台詞を吐くようにマルスは離れていき、それにともなって周囲の生徒たちも訓練に戻る。

「大丈夫かい。」

ノルン先生が俺に声をかける。

「大丈夫です。」

俺は即座に答える。いつも師匠に吹き飛ばされているので受け身はとてもうまくなつた。数少ない俺の特技である。

即座に訓練を再開する。この程度のこといつものことである。だからこそ、

「あの手の奴はどうやっても面倒になる。ノルン先生も君を心配し

ている。必要ならいつでも相談に来なさい。」

その言葉を真正面から受け取れず、生返事しか返せなかつた。

ノゾム side out

翌日、この日学園は休み、学生たちは束の間の休日を思い思いにすゞじしていた。

ノゾムはこの日、冒険者ギルドから仕事を受けて、商業区のバイトに来ていた。冒険者ギルドは様々な都市で仕事を斡旋しており、それはこの都市でも例外ではなかつた。

仕事はランクが高ければ条件付きで弱い魔獣の討伐なども受けられるが、彼のランクは低いので主に雑用系しか受けられない。

彼の仕事の内容は単純な荷物運び。

商業区には各国からたくさんのが届くので、運び手は1人でも多いほうがいい。

荷を集めている集積場に来ると親方に挨拶をして自分の運ぶ荷を受け取る。受け取った荷を馬車に乗せ、相方と目的地まで運ぶ。

今日の荷は商業区の道具屋と職人区の医者。

どうやら店で使うものをまとめ買いしたらしく荷は多いが、行先は少ないので早く終わるだらう。

「そついえばノゾム。お前さん彼女はいるのかい？」

突然の質問とその内容にノゾムは思わず答えて詰まる。

「えっ、・・・・・いませんよ。どうしたんですか急に。」

その様子にある程度の確信を得たのか相方の目の色が変わる。
「いや、なんとなくや。こるにしろいなしにしろ、おまえさん好きな人はいるんだろう。教えうよー。」

相方は性格明るく悪くないが、逆に相手の気分そっちのけで自分本位なところがあり、この手の話はしつこく聞いてくる。

“好きな人”の言葉を聞くたびに彼女の影がよぎり、つらくなる。
この手の話を聞かれることはあったが、その時の彼の様子を見て追及する者はいなかつた。

「なあなあなあ、美人か、それとも可愛い系か、話を聞かせてくれよー。」

「・・・・・いきますよ。」

ノゾムは即座に馬を進める。相方がしつこく聞いてくが無視する。
仕事中ずっと質問してくる相方を表面上は受け流していたが、彼の表情は明らかに強張つていた。

終わると親方から給金を受け取り、ノゾムは即座に帰路に就いた。

彼の実家は一般的な農民なので、親の仕送りが期待できない彼には生活に必要なものである。

ソルミナティ学園の授業料は各国の援助のおかげで、学園の規模と比較しても十分良心的だ。

10年前の大侵攻で失った人材の確保は各國でも死活問題で、それだけこの学園に各國が期待し、支援しているのが分かる。

この学園でどれだけ優秀な人間を確保するかが、今後の各国家間の優劣を決める大きな要素となる。

そのため優秀な人材を自國に引き入れることに各國は余念がなく、様々な好条件をつけてスカウトに来る。

特に俺の学年は過去に例を見ないくらい、優秀な生徒がいる。ランクにしてAランクに足を踏み入れていてる生徒が5人もいるのだ。Aランクは一流の冒険者や近衛騎士などが保有するランクで、まだ十代後半の学生がこのランクに至つたと考へれば、彼らの優秀さが理解できるだろう。

ノゾム side

家への帰り道の途中、前方からよく知っている人たちが歩いてきた。ケン・ノーティスとリサ・ハウinz。かつての恋人と俺の幼馴染。

ふたりはデートの途中なのだろう。ケンは楽しそうに笑い、彼女もとても楽しそうでケンに心を許しているのが分かる。

ケンがこちらを見て俺に気付くと手を上げる。リサもこちらに気付くが、顔をしかめており、不機嫌さがありありと見える。

それを見て俺の心はきしりと軋んだ。

「やあノゾム、奇遇だね。」

ケンが気さくに話しかけてくる。その表情に彼女のような嫌悪感みえない。ケンは俺が彼女と別れた後も気さくに俺に話しかけてくる。リサと付き合っていることに対しても複雑だが、以前と変わらず俺に接してくれるので、少しホッとしている。

「ああ、まあそうだな。どれくらいぶりになるのかな。」

「3ヶ月ぶりぐらいだよ。なかなか時間が合わないから。」

「仕方ないさ。俺と違つてそつちはやることがいつぱいあるんだろう。」

「うん、この前もジハード先生に稽古をお願いしたらつい熱が入っちゃつて。」

ケンは、たははと苦笑いしながら話す。1階級の生徒となれば学園の期待も大きく、それ相応の待遇が約束される。それにケンは学園でもわずかしないAランクに到達した生徒だ。大陸に名立たる名士達から個人的に手ほどきを受けることができるのだ。

ケンと話をしていたら隣にいたリサが話しに割り込んできた。

「ケン、いくよ。」

彼女はそう言つとケンの手をとり、歩き出す。俺の顔を見るのもイヤなのかこちらを見ようともしない。

「あつ」

俺はつい引き止めようとしてしまうが、彼女のその横顔は明らかに俺を拒絶していた。

ケンの手を引き、去つていく彼女に結局俺は何も言えず、ただ立ちすくむしかなかつた。

家に帰つても俺の心は落ち着いてくれなかつた。彼女がどうして俺を拒絶するようになったのか。その理由はいまだ分からず、俺の

『気持ちちは田舎らつらのままで』

普段はそれほどでもなくなつたが、学校でリサを見つけたり、恋について聞かれたりすると気持ちがざわめき、やはりまだ引きずつていると自覚する。

彼女に拒絕されたときを思い出す。冷めた目でじちりを見つめる彼女。「さよなら」と一言だけ告げて彼女は背を向ける。訳が分からず問い合わせる俺に答えることなく、彼女は俺の前から去つていった。

あれ以来、俺の気持ちは止まつたままだった。

第1章第3節（後書き）

いかがでしたか？幼馴染一人の登場です。いろいろと足りない分ですが徐々に主人公を含めた3人の関係について書いていこうと思います。

リサについてですが今言えるのは、彼女にも彼を振った理由が彼女なりにちゃんとあります。

それについても徐々に書いていきますので、長い目で見て頂けると幸いです。

第1章第5節（前書き）

今回は第1章の転機となる出来事があります。また新しい設定も出てきますので、それらも人物設定紹介、世界観設定に追記します。いろいろ考えましたが、この小説をできる限り続けることにしました。

完結を目指して頑張りたいと思いますので、ご意見、ご感想をお待ちしています。

ノゾムは次の日も商業区の集積場でバイトをしていた。

この日は相方はおらず、親方には集積場内の貨物の整理と記録を頼まれていた。

運ばれてきた荷と出荷した荷の確認が終わり、その旨を担当に伝えると、彼は「伝えることがあるといい、ノゾムを自分のところに呼んだ。

「そう言えばノゾム、この間獵師が森で龍を見たっていう話を聞いたことがあるか。」

「龍・・・ですか？」

龍。

大陸で最強の存在。

精霊種の1種で絶大な力を誇る。

かつては龍を倒し、その力を手にした者もいるらしい。

その龍殺しと呼ばれる存在は今現在おらず、その存在は歴史の教科書や伝説に残るのみである。

「でもこんなところに龍なんて伝説上の存在いますか？」

「おれもそう思う、おおかた竜を勘違いしたんだろう。まあお前はよく森に行くんだ、竜だとしても耳に入れておいたほうがいいと思ってな。」

そう言つと親方は一カツと笑つた。

竜は龍と違い、魔獣の1種である。

力は龍に及ばず、また知能も低いが人間には非常に大きな脅威である。

その力は魔獣の力テゴリーでは間違いなく最上位の1種である。

確かにどう考へても俺では勝ち目はない。

「分かりました。気付けてます。」

俺は親方に礼を言いい、師匠のところへ行くために帰路についた。

ノゾムは家に帰り、愛刀などの準備をして師匠の小屋に向かう。服装は魔獣の皮を使用した動きを妨げない最低限のもの、腰ベルトにはナイフとポーチを取り付け、ポーチの中にはポーション等の治療具一式、あとは、煙幕玉と音玉と爆雷玉が入っている。煙幕玉はその名の通り煙幕を発生させるもので、音玉は大きな音を出して驚かせるもで、うまくいけば弱い魔獣なら追い返せる。

最後に爆雷玉。

これは投げた周囲に上位魔法に匹敵する雷を放つ物で値段もそれ相応に高い。

しかし、彼は基礎能力が低い上、威力のある気術も気量の関係上使用回数が限られるので、もしものためにと、師匠が買ってくれたものだ。このように自分自身に影響する強化系のアイテムの効果は制限されても、自分自身の能力に依存しないアイテムの威力は制限されないので、森に行くときは必ず持つていくようにしている。

シノの小屋に向かう途中、霧が出てきたので彼は少し足を速める。その霧は段々と濃くなり、1メートル先も見えないほどになる。

「まずいな、これは。」

ノゾムはつぶやき、常備しているコンパスを見るとクルクル回り、

一定の方角を指さない。

「どうじつ」とだ、これは。」

この森は確かに多くの魔獣がいるが、コンパスを狂わせるような特性はなかった。

異常な事態に焦る気持ちを深呼吸して落ち着かせると、周囲をもう一度確認してみた。

木々が生い茂り身を隠せるが、安心して休めるような場所ではない。

「とりあえずここにいても仕方がないか。」

とりあえず安全な場所の確保が必要と判断し、迷わないよつにナイフで通る木々に印をつけながら歩く。
しばらく行くと森を抜けたらしく、木がなくなり、開けた場所にきた。

霧も徐々に晴れはじめたらしい。

彼がほっとした瞬間、突然周囲の風景がゆがんだ。

「えつ。」

次の瞬間、彼は見知らぬ場所に立っていた。

周囲を山々が囲み、見渡す限り不毛の地。明らかにアルカザム周辺ではない。

困惑している彼を巨大な影が覆つた。

何事かと思い上を見た瞬間、ノゾムは絶句した。

巨大な黒い物体が空の半分を覆っていた。

それは巨大な5色6枚の翼を持ち、力強く羽ばたいている。それには漆黒の鱗があり、その重厚さはその生きてきた年月を象徴しているようだ。

その瞳は深淵の闇を抱き、地上のちっぽけな彼を睥睨している。それすべてが絶望を体現していた。

“滅龍王ティアマツト”

同族の龍族すら食らい、恐れられた異端中の異端の龍。5千年前に地上から消えた伝説の龍がそこにいた。

ノゾムは呆然とした表情で佇んでいた。

今の自分の状況が理解できないのだ。

普通に考えればいくら魔獣が出るとはいえる自分の生活する街のすぐ目と鼻の先で伝説の龍に遭遇するなど考えない。

混乱している彼は知る由もないが実はこの空間はティアマツトを持て余した龍族が大陸の地脈を使い、精霊たちの住む幽界と現実世界の狭間に作つた仮初の世界でティアマツトを封印するための世界なのだ。

ただ、所詮仮初の狭い世界、極端に強い力を持つティアマツトの力を受けて揺らぐことがある。

その揺らぎは地脈を通して、つながれた地脈のせいで大陸のどこかに繋がり、道を作ることがある。

その道はティアマツトが通るには遙かに小さいが、人間などのたいていの生物は通過できる。

彼はその道を知らないまま通り、この封印世界に来てしまったの

だ。

ティアマツトがノゾムを見下ろす。その眼には久しぶりの獲物を見つけた純粋な歓喜がある。

漆黒の龍は翼をたたむと一直線にノゾムに向かつて降下してきた。ノゾムは咄嗟に全身に気を張り巡らせ、地面を蹴つてその場から離れる。

直後、轟音とともにリニアマットが降り立つ。

龍の自重と、落下時の衝撃で地面がめぐり上がり、衝撃波とともに周囲に飛び散る。

呪きつけられた。

咄嗟に受け身を取ったので自立した外傷はなし
や岩の破片で所々切り傷ができている。

波は即座に散退を決めた。

持っていた煙幕玉をすべて叩きつけ、発生した煙幕にまぎれて全速で森まで逃げる。

森の木々に隠れてしまえば逃げる時間が稼げると彼は考えた。
だが考へが甘かつた。

彼が煙幕にまぎれて走っていると、途轍もない咆哮とともに煙幕が全て晴れてしまつた。

それだけではなく襲つてきた衝撃波で再び吹き飛ばされた。

純な咆哮と、それに伴う衝撃波だけで、煙幕もろとも吹き飛ばされてしまったようだ。

ノゾムが驚愕しているとティマットは口を大きく開く、その口には黒い巨炎が集まる。

その炎は様々な色が混じつた混沌の黒。

ノゾムは自分の本能が鳴らす最大の警報に従い、瞬脚で離脱する。吐き出された巨炎は彼のギリギリ横を通過し森に着弾。

次の瞬間、世界から音が消失した。

ノゾムは気が付くと空を舞っていた。

人生初体験の空中遊泳、そんな自分を他人事のように感じていが、数秒後、地面に叩きつけられた衝撃で彼の意識は無理矢理現実に引き戻された。

落下の衝撃で痛むからだに鞭を打ち、ポーチからポーションを取り出して飲み干す。

回復薬が体を癒していくのを感じながら森のあつた方を見て絶句した。

森は完全に焼失していた。

着弾地点にはソルミナティ学園が入ってしまうのでは思えるほどのクレーターができており、その中の存在は完全に消滅していた。クレーター周辺の木々は吹き飛ばされた上、一瞬で焼き尽くされたのか、原形すら分からぬ状態で炭化している。

かろうじて焼かれなった木々も衝撃波ですべて根っこから吹き飛ばされていた。

呆然とした表情でティアマットに振り替えると漆黒の龍が翼を5色6枚の翼を広げた。

翼に無数の5色に彩られた光球が作られる。

“精靈魔法”

世界の眷属と呼ばれる精靈種たちが使用する魔法。精靈種以外が使用する他の魔法と違い、外界に干渉するプロセスを必要としない魔法は奴がその魔法を使うと決めた瞬間に発動し、他の魔法に比べ圧倒的な速攻が可能となる。

ノゾムは再び本能が鳴らした警鐘に従い氣の身体強化を全力でかける。

無数の光球が光の尾を引きながらこちらへ向かって来る。その量は桁外れで彼の視界の大半を埋め尽くす。

ノゾムは全力で退避しながら刀で光球を切り払うが、あまりの量にたやすく光の群れに飲み込まれる。

それでも致命傷を避けようと全力で抵抗する。

光の雨がやんだとき、その場には身体中を貫かれたノゾムがいた。彼は、ポーションを複数薦搾みにして一気に煽る。

「ぐうう！」

ポーションが無理やり体を癒す感覚につめきながらティアマットを見ると、奴は悠々とこちらに近づいてくる。

森の状態を見れば逃げることは不可能。

身を隠す森は焼失し、たとえ身を隠せてもまとめて吹き飛ばされる。

もはや彼に選択肢は一つしかなく、絶望しかない戦いが始まった。

「ハアハアハアハア……」

戦いが始まって十数分。

いや、それは戦いではなかつた。

戦いとは敵と成りえる存在がいてこそ成り立つものであるが、漆黒の龍にとつてそんなものは目のは前にはいない。いのちは自分の退屈を紛らわせるだけの玩具である。

漆黒の龍ならば瞬きの内にノゾムを殺せるが、龍にとつて、これは戦いではなく遊びである。

ちょうど猫が仕留めたネズミをもてあそぶよつ。だが、それゆえにノゾムはこの永遠ともいえる十数分を生き延びられていた。

それでもその先は絶望しかなかつた。

後先考えずに放つた全力の斬撃や氣術は鱗に傷すらつけられない。ティアマットが振り下ろす腕を避けても衝撃波で吹き飛ばされる。逃げることは状況的に不可能。

手持ちの道具には相手の鱗を貫けるものはない。気量も尽きかけ、氣術での身体強化も限界に近い。

そんな綱渡りの状況で、ついに限界が訪れる。何度もか分からな
いが、吹き飛ばされ、地面にたたきつけられた衝撃で体が痺れる。
氣術の効果が切れたのだ。

最後のポーションを震える手で飲み下し、どうにか立ち上がる。

そんなノゾムにティアマットは再び塔の様な腕を振り上げる。
その腕を氣術による強化ができる彼は避けきれない。

ノゾムは避けようの無い死を目の前にして、今までのことを走馬
灯のように思い返していた。

朦朧とした意識の中、絶望的な状況の前に走馬灯が流れ、自分自身の過去を思い返していた。

故郷にいる両親の笑顔。

「考えてみれば、ろくに親孝行してないな。」

いい両親だつた。

リサを支えたいという自分の我儘に何も言わず、生活も良くないのに学園に通わせてくれた。

リサに出会い、一目惚れをした。

「考えてみれば初恋があ、初恋は実らないっていうけどこれは実つたっていうのかな？」

あの時、告白し、一度は確かに想いが伝わった。しかし結局は…

・

リサの夢を支えたい。その誓いを胸に、ただその想いだけでソルミナティ学園の扉をたたいた。

「リサの夢を支えたい。そう願つたけど…今でもそうだけど…

・

思うように伸びない実力と成績、焦りが募り、足搔いたが能力抑圧の発現でその道を閉ざされた。

リサに突然別れを言い渡され、学園から孤立した。

「おれが…悪かったのかな、何でなのかな、何で…何も答えてくれなかつたのかな…」

「今まで胸の奥がいたい。考えるだけでいたい。彼女にとつて俺は大したことない存在だったのかな。」

師匠と出会い、わずかだけど光がさした。

「師匠に出会えてよかつたな。破天荒な人だけど、間違いない人だもんな。」

散々振り回され、地獄のような鍛練の日々だつたが、彼女は間違いなく自分の身を案じてくれた。

初めは無視する気だつたのに、ワイルドドックに襲われた自分を、文句を言いつつ助けてくれたのだから。

今思えば、彼女の前では以前の自分に戻っていた。素直に笑い、素直に怒っていたころの自分に。

次の瞬間、衝撃が彼を襲い、彼の思い出を彼の意識ごと消し去つた。

ノゾム side out

ティアマットの腕がノゾムの前の地面を叩く。その余波で彼は吹き飛ばされ、無様に地面を転がる。

ティアマットは明らかに遊んでいた。その表情は面白そつで、彼を完全に脅威としていない。

ティアマットが大きく口を開く。その深奥に混沌の炎が集まる。彼で遊ぶのに飽きたのか、はたまた彼がどのくらい耐えられるのかを試しているのか。

いずれにしろ、今の彼には抵抗する術がなかつた。

「ググ、アグッエ・・」

彼はすでに声にならない声をあげて、その炎を見つめる。

すでに彼の意識はほぼ無く、もはや過去を思つたりすらできなかつた。

走馬灯は過ぎ去り、ただ濃密な冷たい死の気配だけが彼を包んでいた。

“死ぬ。”

彼はその濃密な死を直視し、硬直する。

“死ぬ”

それはかつて森の中で一人ワイルドドックに襲われた時以上の“死”。

“嫌だ”

理性による思考能力のほぼない彼は、本能のままの思考を展開する。

“死にたくない”

それは強烈な生への渴望となつて、彼の中の最後の命を燃やす。

“あきらめたくない”

それはかつてシノが見た強烈な生きる意志の発露。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

次の瞬間、彼は人のものとは思えない叫びをあげ、己の命を弄ぶ巨龍に呐喊した。

最後の命を燃やしつづくすような咆哮とともにノゾムはティアマットに向かって踏み込む。その速度は死にかけの人間とは思えないほど速い。

しかし、やはり全快の時より遅く、ティアマットまで半分の距離も詰め寄せらず炎が放たれる。

“遅い”

ノゾムの思考は、ただ生きるために目の前の脅威を排除することのみに集中している。その極限の集中力は彼の体感時間を何倍にも伸ばしていた。その中で彼は自分の動きの遅さに苛立っていた。

“どうして俺はこんなに遅い！！”

これでは目の前に迫る死の巨炎を避けられない。

ふと自分の体を見ると身体中を見たこともない鎖が縛つっていた。

“こいつのせいか！！”

彼はこの鎖が自分の枷であると確信し、引き千切ろうと鎖に手をかける。

普通に考えれば鎖を引き千切るなど簡単にできるはずがない。だが彼にはなぜか鎖を千切れるという確信があった。

力任せに鎖を引くと、崩れるような音をたてて鎖がちぎれる。

次の瞬間、彼は一瞬で加速し、炎の下をくぐりぬけた。

会にノゾムは全力を掛ける。

の、身体は彼の思考を即座に反応する。

彼の身体の能力は明らかに全快時の状態以上に跳ね上がっていた。走りながら抜いていた刀を納刀。納刀した刀に全力で気を送り込む。送り込んだ気を極圧縮。裂ばくの気合とともに刀を抜刀する。

髪の毛よりも細く、鋭く圧縮された気は、抜刀の速度と同じ速度で飛翔。ティアマットの両目を真一文字に切り裂いた。

考えてすらいない反撃にティアマットが咆哮し首を持ち上げる。

幻無は刀身に圧縮された気による斬撃を放つ単純な技だが、極圧縮された気は視認することは難しく、高速の抜刀術と同じ速度で飛び、十数メートル以内なら、ほぼ抜刀した瞬間に着弾するので回避は非常に困難である。

しかも極圧縮された気は、鋼鉄の盾だろうと魔法障壁だろうと問答無用で両断し着弾するので防御も難しく、極めて殺傷能力が高い技である。

ただ、気を極圧縮する必要があるので、半秒から数秒の溜めが必要であり、また複数の敵に囲まれた状況では大きな隙をさらすことになる。

ティアマットに駆け寄ると奴は前足を持ち上げ、何度も地面に打ち込んだ。

巨大な前足が何度も何度も地面を叩き、その度に地面が揺れ、局所的な地震を起こす。

ノゾムはあわてて離脱し、ギリギリ奴の前足の間合いから離れるが、あまりの地響きに足を取られる。

このままでは身動きが取れない。だが次の瞬間、地面が陥没しその穴にティアマットの巨体が入り込んだ。

どうやら地下に存在していた空洞を踏み抜いてしまったようだ。ティアマットはどうにか抜け出そうとしているが、目をつぶされているのでうまくいかない。

ノゾムは奴との間合いを詰めながらポーチの中のそれを全て取り出し、一塊にして奴の頭に投げつける。

投げつけたのは音玉。それはティアマットの顔面近くで炸裂し、

強烈な音を周囲に響かせる。

至近距離で音玉の直撃を受けたティアマットは一瞬目を回し、動きが鈍る。

これがもし精霊ならここまで大きな影響は受けなかつただろう。龍は精霊種の一種であるが源素の塊とはいえ物理的な肉体を持ち、生物としての側面を持つてゐる。

物理的な肉体の感覚を使つてゐるがゆえに、不測の事態でその感覚が失われたり、混乱させらることがあると、その影響をもろに受けてしまつことがある。

もちろん彼ら龍は物理的な影響を受けやすいとはいえ精霊種である。それにふさわしい超常的な感覚も身に着けてはいるが、肥大しそうた力を持ち、それゆえに理性の大半を維持できないティアマットはあり得ない事態の連續に完全に混乱してゐた。

ティアマットは完全に動きを止めてゐる。ノゾムはティアマットのそばに全速力で駆け寄る。

狙うのは龍の首。首を狙つた理由は、かの龍の頭の頭蓋を割れる

か、ノゾムには自信がなかつから。

龍は物理的な肉体を持つ。つまりその肉体を死に至らしめることができれば、殺せるのである。

肝心なことは奴の肉体を殺すこと。

だた、龍自体が極めて強い肉体を持つので、容易ことではない。

ノゾムは持ち上げられた龍の首に向かつて跳躍。再び納刀した刀に氣を送り、極圧縮。抜刀しつつ、刀を一閃する。

氣術“幻無”がティアマットの喉元の鱗を切り裂き、圧縮した氣

が内部で破裂。弾け飛んだ気は漆黒の鱗を内側から弾き飛ばし、やわらかい皮膚を露出させる。

氣術“幻無”回歸”

先ほど一閃した抜き打ちの軌道を逆になぞる様に返しの一撃が放たれる。

その一撃はティアマットの首を深々と切り裂き、大量の血が湯水の如く噴き出す。

しかし、普通なら致命傷の傷を受けても漆黒の龍を倒すには足りない。

ノゾムは返しの一撃の勢いを利用し、体を一回転。回転の力と跳躍の勢いを合わせて、今切り裂さいた首の傷口に突貫する。

突き入れた刀は巨龍の首に深々と突き刺さり、刀は喉を通じ、脳幹近くまで達するが、彼は突き入れた刀を支えに宙ぶらりんとなる。

しかしそれでも龍は倒れない。

れする。

刀は肉に埋もれ、押すことも引くこともできない。このままでは振り落とされ、大地に血みどろの赤い花を咲かせることになる。

取り出したのは、最後に残っていた爆雷玉。

それをありつたけの力で刀の刀身に叩きつける。

次の瞬間、眩い光とともに雷が奔った。上位魔法に匹敵する雷は付き入れた刀と首の神経を通り、龍の脳神経細胞を焼き切った。だが雷は彼の体も焼き、残っていた力を完全に奪い取った。

龍の巨体が崩れ落ち、彼の身体が投げ出される。龍の身体はわずかに動いているが、その眼にはもはや生命の輝きはない。やがて龍の巨体が崩れ落ち、光の粒子となつて津波のよみに舞い上がる。

ノゾムは光の粒子が天に舞い上がる様子を、もはや考えることも出来ず、ただ見ていた。

彼自身も満身創痍、四肢あるが無事な所はひとつもない。やがて光の粒子は、彼の上空で集まると、怒濤の勢いで彼めがけて落ちてきた。

限界を超える、動くことができない彼は迫りくる光の激流に飲まれ、意識を失った。

ゆつくじと意識が覚醒する。

いまだ夢の中にいる意識がティアマットとの戦いを思い出し、覚醒する。

激痛が全身を襲つが無理矢理上体を起こし、周囲を見渡すとそこは都市郊外の森の中だった。

「いつの間に・・・戻つて・・・きたんだろう。」

訳の分からぬ状況の中、全身に走る痛みが先程の戦いが夢でないことを伝えてくる。

「とにかく師匠のところに……」

自分がどれだけ意識を失っていたか分からぬが、ここに居続けるのは得策ではない。そう判断し、ノゾムは痛む体を無理やり動かし、朦朧とした意識の中、シノの小屋へ向かつ。

自分が歴史上数人しか存在しなかつた“龍殺し”になつたことに気付かないまま……。

第1章第5節（後書き）

第1章第5節投稿です。

いかがでしたか？今回ティアマットを倒して龍殺しになつた主人公ですが、完全な最強にはなりません。理由は次の話で説明します。彼がティアマットを倒せたのは、ティアマットの油断や龍の体の特性、5000年間の封印、主人公のいきなりの能力の変化、空中ではなく地上だつたなどいくつもの偶然が重なつた結果です。本来なら彼ごときでは傷も負わせられません。

今回はいろんな意味で転機のきっかけとなる事件です。

そろそろ第1章の終結も近いです。第2章は設定はほぼできていますが、まだ執筆していません。

第1章の結末もまだ途中なので、少し時間がかかるかもしれません
が、ご容赦ください。

それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7408y/>

心の中の”こころ”

2011年11月24日21時53分発行